

九州に於ける中国史前の黒陶系の土器

梅原末治

【要約】 一九三〇年代のはじめに山東省城子崖遺跡の調査で新たに知られた黒陶は、其後、北シナの各地に濃密に分布して史前の彩陶につづぎ殷代の白陶に先立った著しい中国での土器様式であることが明らかになった。ここに云う黒陶系の土器は、その様式をうけたもので、右の中心以外の各地より、四隣の国土に波及したものを指す。この事はまた各地に於ける出土品に依って認められたことである。遠く離れた九州の一部に右の黒陶系と認められる特色を示す土器の出土していることの管見に上ったのは早く一九四〇年代の終りであった。しかし、当時にあつては、この国土に於ける外来に基づく土器様式が所謂弥生式土器にはじまるとの先入の主観よりし、且つは黒陶そのものについての知見を欠いたこと等から、固より看過された。そしてその後新たに注意に上つたものをはじめ更に見出された同じ顯著な類にあつても、依然として現在に及んでゐる。

この小文は四年前熊本県御船町の遺跡で新たな出土が報ぜられたのを機会に、是等の九州に於ける黒陶系の土器類について、国外に於ける確実な黒陶系の遺品と対比して、その然る所以を説いたもので、これに依つて中国の古い土器様式の早くこの国土に波及し受容されたことを明らかにすると共に、併せていまや通念化した観のあるこの国に於ける史前土器の編年観の止揚せられる可きことに及んだものである。

史林 五二巻三号 一九六九年五月

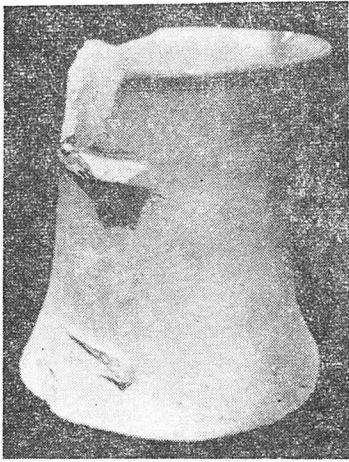
一

ここに黒陶系の土器と言うのは、一九三〇年代の初めに中国の山東省城子崖遺跡の発掘調査で見出された同国史前の新たな土器様式として、いまや周知の殷代の白陶に先立つものとせられてゐる黒陶の系統を受けた類を指すものである。中国本土での史前時

代の黒陶に就いては、それに先立って知見に上つた所謂彩陶と並んで、爾後山東省のみでなく河南省其他の各地にも広く分布することが明らかとなり、殊に戦後中共治下になってよりの各地方の遺跡の学術発掘でいよいよ明瞭の度を加えているのは周知の如くである。それと、同時に器形をはじめ、造りの点などで、この黒陶の系統に属するものの引続いて行なわれていたことが、当初に

あつて黒陶であるとした浙江省良渚遺跡の出土品の如き、その示す實際よりしてこのことが認められた。そして同じ黒陶系の土器類が、中原の史前の文化の及んだ四隣の地域に於いて、北の遼寧省旧闕東州の一部や、南方の台湾島に於ける其後の遺跡の発掘調査の出土品からまた、それが察せられることになったのである。

我が九州地区に於ける所謂弥生式土器のうちに器形はしめ作りの点で、中国に於ける右の黒陶系と認むべきもののあることが私見に上つたのは、終戦後間もない時であつた。その遺品は坂本経堯氏が戦前熊本県菊池郡地方で多年に亘つて蒐集せられた夥しい史前の土器類のうちに含まれた把手のある円筒形（コップ形）をした極めて目立つものである。そして氏に依ると泗水町大字住吉^①



第一図 熊本県泗水町出土
把手附円筒形土器

字前原出土のその
一は（第一図）早く昭和六年七月二十七日に見出したものであ

ると云う。然るに右の特色のある土器は戦後に於けるこの国での史前時代土器の編年観がそれまでの諸知見に基き、石器時代のそれと、つづく別個な所謂弥生式土器とに区別せられて、而も特色のある前者の縄文式土器が史前の狩猟漁撈を生活の基調とする、多様な様相をその上に展開しながら永く続いたものであるに對して、それとは違つた後者が農耕なる新たな生活様式と共に外から伝えて急速に行なわれることになつたとする。そして此の弥生式土器がおそらく直接に韓半島を經由して銅利器・銅鐸其他との文物と共に中国での戦国末より前漢時代の頃に行なわれることになつたとするのがよく考古学上の諸事象に即応するとして俄かに教条的なものとなつた。殊にこの弥生式土器に於ては、一部学徒の所謂遠賀式土器を初期とする形式を細分した所説が不動なものとして、それを以て新たに各地に於ける発掘調査に抛る夥しい出土遺品を律すると云う傾向を示したことであつた。従つて上記の遺品の如き全く顧みられることなく、それに連関して其の前後同系のものとしてせられる九州に於ける縄文式土器の末期の御領式土器の如きも固より看過されて来たことであつた。

然るに三四年前緒方勉氏が同じ熊本県下の御船町一帯の高台のその弥生式遺跡の調査で、同じ円筒形をした器類が重環紋土器其他と共に共存する事実を新たに確かめて、その一部を一昨年秋の京都

国立博物館新館竣工記念展観に復原形を出陳するにいたつてようやく一部の注意に上ることになった。ただこの新たな円筒形品に於つても当の緒方氏は、その一個の把手が中国に於ける周代の古銅器との同似を特に注目しながらも、それ等と共存する所謂弥生式土器の編年観に左右されて重要なその基くところに就いての認識に及ばず、他の同地方の研究者に於つても依然同調するように見受けられるのである。

問題の円筒形容器の遺存を注意して以後、中国本土、殊に旧関東州地区と台湾島に於けるこの黒陶系土器の知見の拡充に依つて、右の御船町の新たな出土品に強い関心を持った私は、緒方氏の寛容に依つて一昨春実地に出掛けて、夥しい出土の土器の全般に亘つて自由に調査を行なうことが出来て、この類がその器形の上でまさしく黒陶系のものである認識を強めると共に、同時に伴出した同じ弥生式土器類のうちにも同じく黒陶系と認められる類があった。それ等が同県下にも広く分布して、その或ものが史前時代の縄文式土器の晩期の一層黒陶系と見られる御領式土器との連関を示すもののある事も知り得たのであった。されば緒方氏が嚮にその自からの発掘調査の概要を公にせられたので、ここに御船町に於けるこの円筒形土器と其他の若干の遺品の实体に就いての所見を記すると共に、九州地区での同じ黒陶系と認められる土器

に就いての所見を記するであらう。

① 梅原「肥後菊池郡発見のコップ形容器」『人類学雑誌』第六二巻第四号

② 緒方勉「熊本県下山神遺跡出土のジョッキ形土器」『熊本史学』第二七号所掲

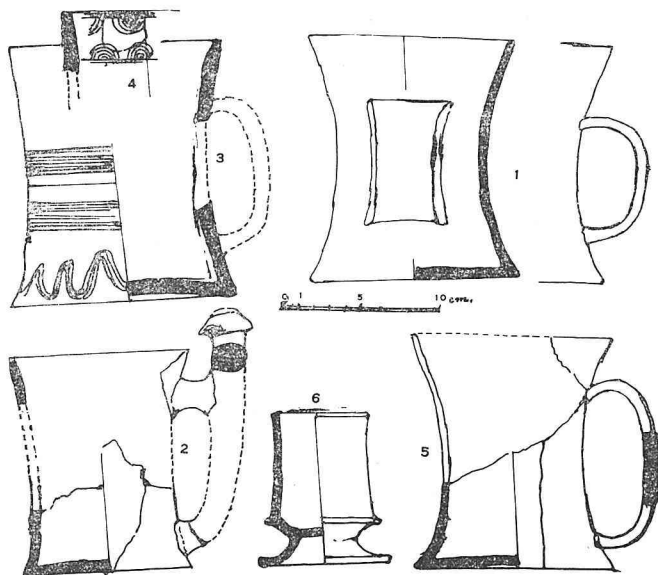
二

御船町字下山神の台地の住居の遺跡で緒方氏が発掘した円筒形容器類は、同氏の記述に明らかなように、夥しい所謂弥生式の重弧紋土器類と共に同じ層位に包含された目立つた他の一類をなすものである。それ等は遺跡の性質上すべて破損しているが、その数量はかなりの個数を数える。そしてうちに原形に復し得たものは、一様によくその特色ある器形をなすこと第二図または第三図の1の如くである。即ちそれ等の器は、筒形をし体の中程が内に彎曲して口縁が外に開いた上辺と同様にそれに対応した大きい底面が平であり、体の側面の一方に縁のある幅広い大きい帯状の把手を造り附けた高さ一五纏の容器としてまさに一の成形をなすもの。そして胎土は黒味を帯びて器体が割合い薄手に作り上げられてある。

この器形は二十年前に同県下菊池郡ではじめてその遺存を知つ



第二図 御船町下山神出土把手附円筒形土器

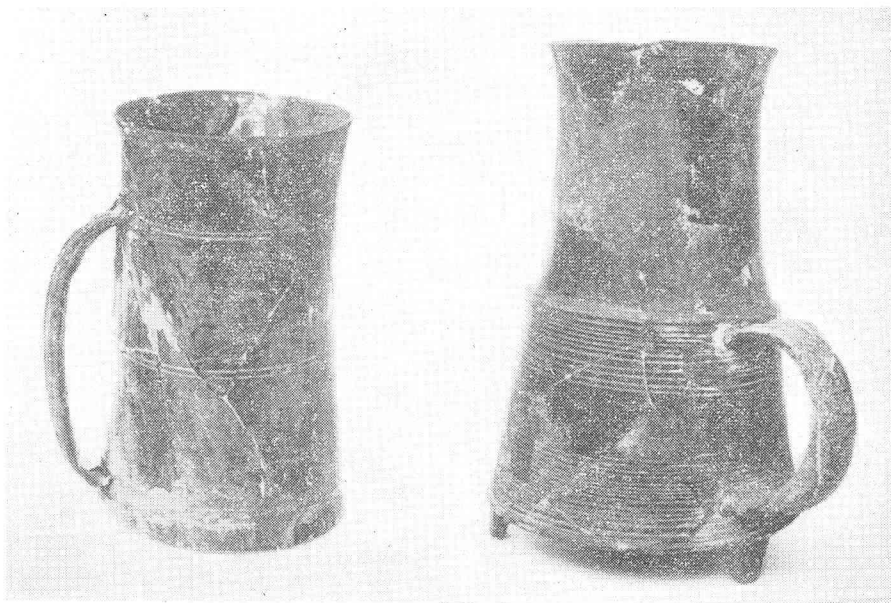


第三図 円筒形土器類側面

たものと全く同じであるに加えて（第一図）、其後玉名郡青野出土の乙益重隆氏が取得した高さ一四・五糎の平な底面のやや内反りを示す器ともまた殆んど差異のない（第三図の5）ものである。

尤も本遺跡出土の同形の土器は、その数ある破片のうちに胎土が所謂弥生式土器と同様の、厚手のものなども見られ、また器側に施紋のあるものがある。その把手にあつても、第三図の2の器のような違つたものがあつて緒方氏に依つて中国の古銅器のそれとの形の類似が特に指摘されたのである。是等の所謂細部に就いては中に刷毛目の波状紋と条線紋（第三図の3）と、所謂重弧紋土器に於ける同様な刻紋（同図の4）が認められて、その点で、この器の作られた当時の環境を示唆するものがある。またその後者の丸い把手の上部に一見笠形とも見える柱頭を作つた復原した側面形は稚拙な動物を表わしたものと見える点は、殷大墓群の発掘で明らかになつた大理石で作つた同代の円筒形容器にあつて禽獸形の把手の注目を惹く物があるが、その異様化したものであることを思ひしめるのである。

さてこの様な器形に就いて、現在なお、一部にこの十年来北九州で発掘調査の行なわれた豊後安国寺、筑前立屋敷遺跡に遺存した木器をはじめ、出雲猪ノ目洞窟から出土の同じ木製品等と同似するのを挙げられているが、その以前の先行の实例を欠如するのに対して中国での史前の黒陶系の土器に関する知見にあつては、一九四三年代の発掘調査の行なわれた旧関東州四平山積石塚群出土の夥しい黒陶^①—現に京大文学部博物館保管—のうちに器体



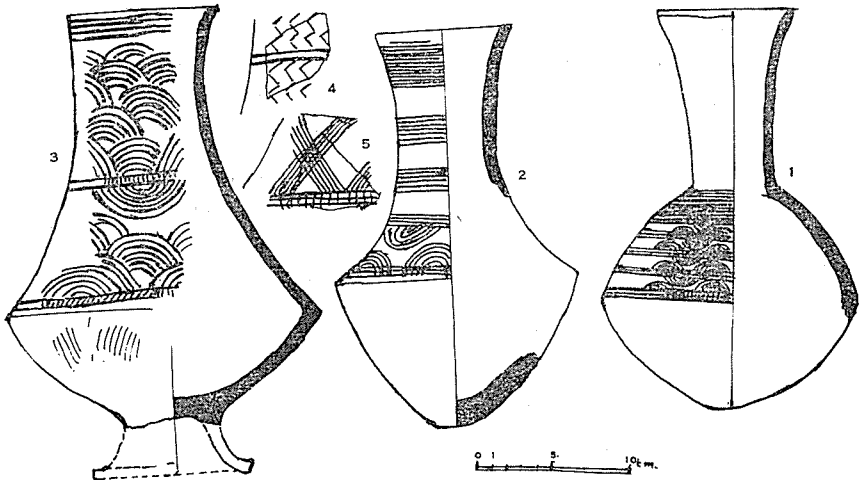
第四図 四平山出土黒陶系円筒形土器

は細長いが、同じ把手のある円筒形の黒陶があって、第四図の右の一例の如きは特に相似を示すのである。従って土器そのものの胎土なり薄手な作りと相俟って、其特色ある土器類の系統が我國土に及んだ所産であること、山の神での新たな上記の把手の器の所見をも併せて、殆んど疑問をのこさないであらう。

① この旧関東州四平山の積石塚の発掘調査報告は、敗戦に依る爾後の情勢其他でいまに刊行されていない。従うて顕著な此の遺跡と夥しいその黒陶に就いてはなお一般に知られない域がある。併し中で復原された主な類は戦後京都大学文学部博物館に陳列せられて、中国史前の文物に関する出版物にはそれ等が載せられているのである。同遺跡はこれまで調査された所謂黒陶の遺跡の中では最も著しいものであって、而も伴出の玉器類其他よりして実年代が周初にあることの推されるものである。

三

御船町下山神遺跡で右の円筒形土器と共存していた土器にあった他の著しいのは既に触れた弥生式の重弧紋土器であるが、それと共に器に台脚のある類も少なくない。重弧紋土器は九州南部での中期の弥生式土器を特色づけるものとせられているもので、長頸の筒形で丸底の器形の局部に直線と半円の弧線との結合した刻紋のある目立った形で、県下の玖摩郡免田地区の出土品が代表



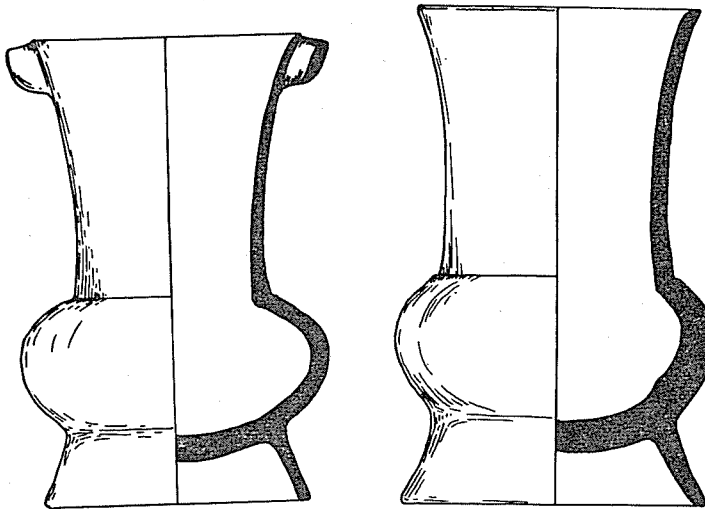
第五図 御船町下山神出土重弧紋土器

的なものとせられている。然るに本遺跡に於けるこの類は、それ等に較べると、器形の点で差異があるばかりでなく、胎土や作りも同じでなく、それ等がまた黒陶系の要素を示唆するのである。

さて数量の多い本遺跡での重弧紋土器は、第五図の三例が示すように、同じ器形ではあるが、長頸の口縁から器腹までの造形にあって、上記の円筒形土器に於けると同じ内反りの曲線のもので、器腹の下半との接点が突稜状の様態を呈するのが目立つのであり(同図の2)、またやや尖り気味な器底に別に外開きの器台を造つたものがあってしかも其端が外に反転した特色を示す。更に施された刻紋が土器の称呼となった重弧紋にあって、既知の同土器に較べると、要素として直線の条帯紋をはじめ所謂複合鋸齒紋などを交えたより多様なものがあり、時に器の長頸部に施されたものもある。第五図の2の如きは中で最も顕著な一例である。またその台のある器では所謂青海波紋のあるのが目立っている(第五図の3)。

ところで是等の土器類は、総じてその器の胎土が良質で表面の滑かであるのは、既知の重弧紋土器と差異を示し、これに先立つ段階のものとしても、北九州地方での所謂弥生式土器に先行する遺品を見受けなことから、また別な系統のものたることを推さしめる。そして此の場合国外のそれとして新たに同じ黒陶系の土

器に同似するものがあるのが注意に上るのである。いまこれを同系の土器に就いて顧みるに早く知られた江南浙江省良渚の黒陶遺跡の出土品にあっては口縁に近く双耳を作っているのは違うが、



第六図 浙江省良渚出土黒陶長頸壺の二例

第六図のような長頸の壺で、短い台を作り添えたものがある。そしてこの様な器形は同遺跡の器では寧ろ普通で、中には発達した器脚形をして、方・円の穿孔のあるものがある。また多様な器体突起した帯条を繞らしたのもあって、それに削り方の手法に依るものも目立つのである。なお長い器脚に斜行線紋を刻した類もあるのは其の作りと相俟って、単なる偶然の類似ではないことを思わしめるものがある。現時点での知見よりすると、本来の黒陶での幾何学的施紋は、殷代以降の同系の土器がながくつづいて、彼の戦国時代の黒色磨研陶器に於けるスリップに依る施紋にもそれが認められることである。

さればこの同似も固より単なる偶然なものでないであろう。この点で別に挙ぐ可きものに、乙益重隆氏の注意で見ることの出来た菊池郡西合志町大字相生で出土した一個の台附コップ型土器がある。良質の陶土で作られた淡褐色をした面のよく磨研されたこの土器は、その台の形に上記良渚の黒陶のそれを併せ示しているのが注意を惹くことである（第三図の6）

この如く所謂重弧紋土器も良渚の黒陶系の土器と種々の点で同様の通性を示すことよりして、また円筒形土器と同じくその系統のものの我國に波及して作られた一類と解すべきであろう。

更にこれを同式土器の一に見る器台のある物にあっては、右の



第七図 黒陶系土器に於ける高杯形の二例（右、良渚 左、四平山出土）

良渚の遺跡をはじめ旧関東州四平山の積石塚出土品にあつても第七図左の如き、我が弥生式土器の高杯の形態と殆んど同一のもののあることは、近年知られた台湾南部に於ける中国の彩陶系の史前の土器に同じ発達した器脚のものを点と併せ観て、同土器に先立つ我國內での縄紋式土器にそれを見受けないことより当然器形の基くところの同系土器の波及に依るものであるのが考えられる。これと共に器に施された弥生式土器を特色づける幾何学的刻紋に於いても黒陶系土器のそれと無関係のものでないであろうことが新たに意識されて関心を高める次第である。

① この良渚の遺跡に就いては夙に何夫行編『抗県良渚鎮之石器与黒陶』施斯更『良渚』（抗県二区黒陶文化遺跡初步報告）が刊行されている、いまま我が国では中国の史前の黒陶の著しい一つとされている。ただし出土の黒陶そのものにあつては、後者報告に載せた中で角丸の台を作った容器が周代中期の古銅器の罍と同形であるのをはじめ、他の器形なり、土器そのもの実相よりし、またこれを伴出の石器類と併せ観て、実は本来の黒陶ではなく実時代の下る、ここに言う黒陶系のものであるのを注記すべきである。

四

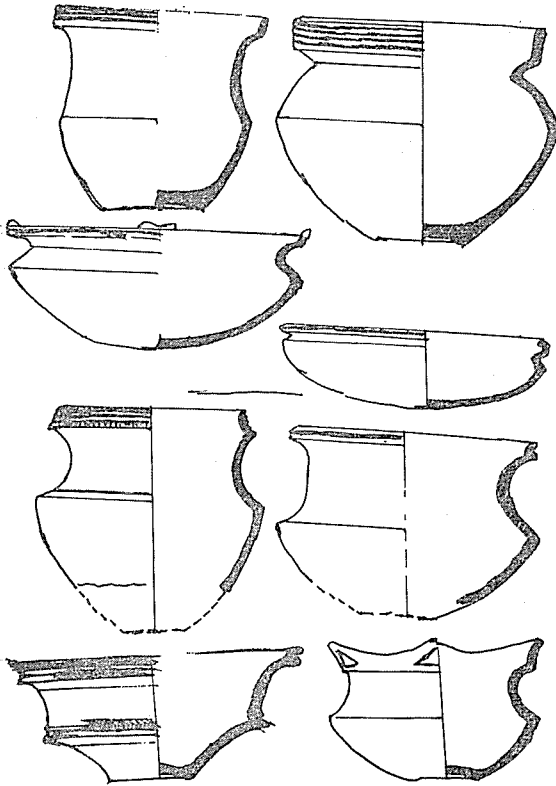
以上、当面の御船町出土の円筒形土器が明らかに黒陶系のものであること、同時に見出された中で重弧紋土器もまた同じ類であらうとする所以を実物に即して概説したのであるが、是等の所

謂弥生式土器に於けるものを別に、土器そのものの実態の上で一層それと同様なものは既に触れた九州北半に於ける史前の縄紋式土器晩期の西平式の、殊に御嶺式土器である。周知の如くこの種の土器は、器形のみならず、その外観なり造りの上でそれ以前の縄紋土器よりも余程進んだ段階のものである。而も器形の特徴とも見える広い口縁に突起があつて、一部に所謂縄紋を印する点を重視してかく位置づけられて、爾後土器そのものの実体の検討など行なわれることなく、右の見解が動かないものとして一般に行なわれている。

併しこの種の土器の標式的とも見られる熊本県下の隈庄一帯の遺跡で故小林久雄氏が発掘調査した実物の示すところは、一九四〇年代の前半にその調査の行なわれた旧関東州の史前の遺跡、殊に四平山の積石塚から出土した夥しい黒陶類と黝黒色をした胎土で薄手に作り上げて、面が滑沢を示している点で、同様の著しいものであること、而も器形にあつて、それに先立つ縄紋式土器の器形と著しく違っていることより、時代の先立つ同系統の土器様式の新たな波及に依る所産たるを思はせるものである。

北九州に於ける史前の遺跡は戦後所謂農耕の生活と結びついたものとする弥生式土器に重点が置かれこれを前代に及ぼす見地よりする各地での発掘調査が盛行している。それに伴うて問題の御

領式土器にあって、農耕と結びついて新たに宮崎県西北隅の三田井町陣内、熊本県に近接した大分県大野郡緒方町大字大石^②などの各地の遺跡の発掘調査がなされて、その実態が一層明らかとなったことである。そしてそれは一九四四年にはじめて注意に上った台湾島に於ける中国の彩陶、ついで黒陶系の文物の波及を示す考古学上の新知見に於ける、最近十年間の豊富な新出土品の示す



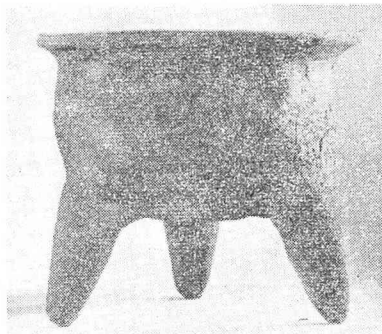
第八図 大分県大石（上）宮崎県陣内（下）出土黒陶系土器

ところと連関して、よくこのことを裏書きするものがある。

さて是等の夥しい所謂御領式土器の新出土品に就いては三田井陣内遺跡のそれを除いて、主としてそれ等の調査に當った賀川光夫氏の病臥などでお殆んど実物を観る機会を得ないが、既に調査の概報が公になった大分県大石遺跡の出土品が示すように、熊本県隈庄出土品に於けるものとの共通性を示したものである（第八図の上半）。即ち、すべての土器の胎土は

黒褐色で、薄手に成形せられた、面に滑沢のあるものであるのは、中国の黒陶のそれとまことによく似たもの。器形にあっては、これに先立つ縄紋式土器と違つて条帯紋の他に縄紋其他の施紋が殆んどなく、口縁の一字字形をした丸底の器形が目立って、所謂西平式で縁に突起を作つたものが寧ろ稀である。また器形の外面の形態にあっては内反りに割つたものや、平な底面の内に反るなどの通性が挙げられる。

三田井陣内の遺跡にあっては細分された第五類より第九類までの土器は全く同様である。そして外に開いたその著しい広口の鉢での



第九図 良渚出土鼎形器

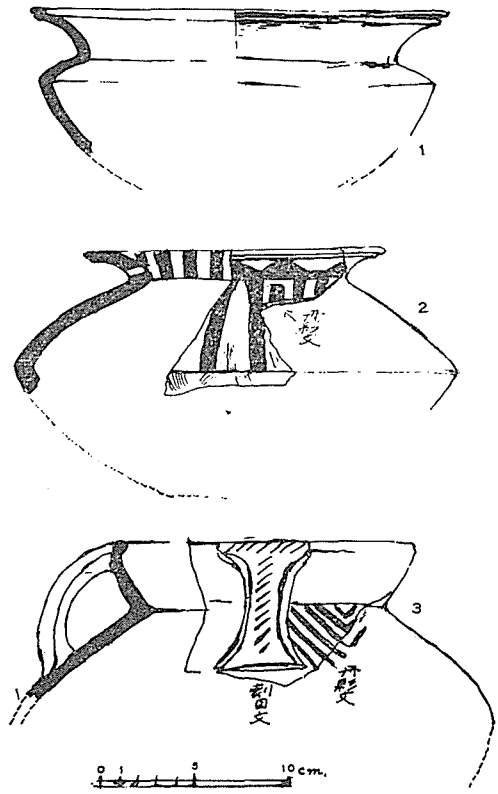
器腹が著しく張って上部がつぼみ口縁が外に開き、底面の内反りの器と共によくその特色を具えているのである。ところでこのような土器は問題とする黒陶系の土器を特色づけるものに他ならぬのである。繰返すことになるが台湾島に於ける現時点に於ける黒陶系なり彩陶系の土器の実相に対比すると、帯状の把手や、器台に著しいものはないが、その同似より早く史前の時代にこの国土に波及したことを改めて意識せしめるものである。伝聞するところでは既に調査の行なわれた大分県下の同様な遺跡から三脚の鼎形の遺品が出土して、特色あるこの中国風の器形が関心を高めたと云う。それがいか様な形のものであるかは知らないが、浙江

省良渚出土の黒陶系の土器に第九図に載せた如きものがあるのをこの場合記すべきであろう。これは出土する石器類よりし、殊に三田井陣内の遺跡に於ける特色のある土偶及び石棒の遺存より見て史前の

繩紋式文化の晩期たることの明らかな時期での主要な土器様式が他に著しく異なって中国での黒陶系の土器と同似を示すこの事実は早くこの時期に我が国土に波及したことを示すものであろう。ところでその土器の形と連関して別に顧みられるものは、緒方氏が山の神遺跡と相前後して発掘調査した同じ御船町台地の南原地区に於ける弥生式遺跡に、右の御領式を特色づける器形を同じうするものが多いことである。なお、それと共に重弧紋土器と同じ長頸壺で、肩部に突圍帯を繞らしたものが共存する。

南原遺跡での如上の土器類はすべてが破損して完形品がなく、その外観は一見弥生式土器と見られるが、器の作りが薄手で焼成度が高く、或いは黒褐色に近い面を磨いたものなどがあって、器形と併せて本来の御領式土器と同似すること明らかである（第一〇図の1）。そして口縁其他の直線条帯を除いて、施紋のないことも同様である。然るにこの口縁の内外から器の肩部に互って朱彩紋のある一片があつて注意を惹くのである（第一〇図の2）。丹塗りの器は北九州の弥生式土器にその例があるのが夙に知られていて、現に本遺跡でも上記長頸壺にもそれが見られることである。併し大和唐古遺跡出土の著しいものを除き、西日本での彩紋のあるのは知られていない。

然るに此の器の彩紋は第一〇図の2の如き幾何学的な直線紋で



第一〇図 御船町南原発見土器片(1・2)と台北円山貝塚発見土器片(3)形状図

あって、それは一九四四年以降新たに知られた台湾島南部での彩紋土器のそれと同式であって、而も有名な台北の円山貝塚の既往の出土品にこれと器形を同じうするもの―尤も外方に張ったその口縁の左右に帯状の双耳のあるのは目立つものではある―があること台北のものと省立博物館収蔵の同図の3に示すが如くである。この顕著な類似は固より単なる偶然のものではあり得ない。これを台湾省南部に於ける中国史前の黒陶乃至彩陶文化の波及の示す新知見よりすると、円山貝塚の器片は黒陶系の土器に、彩陶を特色

て、右の如き顕著なものをはじめ、他にもその類のあることを示唆することである。

此の北九州に於ける黒陶系土器についての知見は、この国での農耕の生活文化が所謂弥生式文化期にはじまるとする大正十年代に於ける、その土器に粗の迹を印したことより提唱されて、いまや教条的に見える見解に対して、縄紋式文化の晩期に於ける黒陶系の土器の存在に依って、同土器が中国にあっては既に農耕を生活の基調としていたことから当然止揚せられる可きであるのは言

づける彩紋を施したものと云う可きであろう。引いて南原のものも、その波及であるのが想察されることである。

之を要するに北九州での把手附円筒形の特徴ある遺品をはじめ、他の若干の諸実例の示すところは、中国史前の黒陶系の極東地域出土のものに類似を示す点で、既に縄紋式文化の晩期に日本にも波及して、それが当時の北九州の新たな土器形となったこと、従って弥生式文化期に於い

を待たない。同時に弥生式土器を基調とする文化期にあって、その土器様式についての所謂遠賀川式土器を初期としてそれ等を中期後期に分ち、更にそれぞれをまた細分している現時の編年観の如きも、この黒陶系土器の示すところより全般に改めて再検討せらるべきものであるのを強く考えさせることである。

終りに問題の黒陶系の新知見として附記すべきは、近刊の『青銅遺物図録』（韓国国立博物館学術資料集一）に韓半島南部からの同式の出土品を載せていることである。それは忠清南道太田槐夢洞の古墓で銅劍其他の青銅器等北九州の弥生式文化期中期のそ

れに先立つものと一所に副葬されていたもので、器は高さ二二釐の完好な長頸壺で、よくこの通性を示している。これは我が本土への外来文化の波及の径路として従来特に重視せられた地域に於ける出土であるのが注目されることである。

① 八幡一郎・賀川光夫等『埴内遺跡』（日向遺跡綜合調査報告第二輯、宮崎県教育委員会刊）

② 『繩文式晩期農耕文化に関する合同調査―昭和四十年合同調査―』（大分県大野郡緒方町大字大石遺跡）

（昭和四十四年三月二十日稿）

Some Pottery in Kyushu 九州 Related to the
Chinese Prehistoric Black Pottery

by

Sueji Umehara

The Black Pottery, discovered at Ch'êng-tzu-ya 城子崖 in Shan-tung-sing 山東省 at the beginning of 1930's, had given much influence to the pottery types of the neighbouring countries, in one of which, Japan, I confirmed the pottery distinguished by the very lineage of the Black Pottery as early as 1940's. Comparing with the remarkable pottery types unearthed from the other archaeological sites, especially in the south coastal China, I can affirm that the cylindrical vessels with handle and the other characteristic types newly emerged from the latest stages of the Jomon prehistoric period and continued to be used early in the subsequent Yayoi period. In addition to this argument I also point out that the pottery on the line of the Black Pottery is combined with agriculture in the latest stages of the Jomon Period.